

## センターの第1期を終えて



先端基礎研究センター長 ■伊達宗行■

日本原子力研究所（以下 原研）に先端基礎研究センター（以下 センター）が理事長直結の新機構として発足したのが平成5年4月である。当センター設立の主旨は次のようなものである。これまでの原子力研究が欧米に追いつけ、追いこせで走って来た結果、技術の水準では世界一流の域には到達した。しかし、これからの原子力を幅広く支える基礎科学の面での欧米のポテンシャルには水をあけられており、世界への発信能力を欠いている。そこで原研の基礎研究のリストラを行うと共に、個性ある発信力を持った先端的な基礎研究を集中的に行う場を設定する、というものであった。折からの基礎研究重視の声の中でこの構想は順調に進展し、当初12研究グループが発足した。原研における既存の研究グループと異なって各グループの構成は外部、主として国立大学の研究者をグループリーダー、あるいは構成員に招へいしてのチーム構成となっていること、そして研究期間は5年をメドとした期限付きで、かつセンター長は外部より招へいする、という原研としては画期的な新構想であった。

それから5年の歳月が流れた。その成果はどうか、それが本基礎科学ノート Vol. 5 No. 2の主題である。年2回の刊行である本ノートが通刊10号を迎えたことにその節目があり、編集にアクセントが付けられている。

平成5年に発足した12チームの中で、工藤グループ（超原子価結合の分子化学的研究）、田島グループ

（荷電粒子多体系の研究）及び佐々木グループ（放射光による表面化学研究）の3チームは5年を待たずに解散した。工藤グループの場合はその研究成果が認められた工藤リーダーの東北大学教授への転出によってチームの解散となったものであり、後の2チームはSPring-8の進展に伴い、その研究力を関西に移行させるためであった。そして残りの9チームが5年間をフルに活用したわけである。先行の3チーム、及び12チームの後に発足した4チームを含むこれまでの研究のあゆみについては近く総合的な報告書をまとめることになっているが、本ノートにおいては今回終了した9チームのグループリーダーに執筆を依頼し、成果の要旨をまとめてもらった。これはいわば自己評価である。各チームリーダーが何を意図し、どんな研究をして何を得たか、が示されている。しかし筆者が目を通した限りでは、だれにもわかるように易しく、との依頼にもかかわらず専門的で固い。その意味では期待に反するのであるが、研究内容には内外に大きなインパクトを与えた研究成果が含まれており、これらについては現在準備中の報告書でわかりやすく述べたいと考えている。

なお、本ノート第10回を記念して巻頭言には斯界の最長老の伏見康治先生に一文をお願いした。御快諾いただき、巻頭を飾ることが出来たのを深く感謝している。